

狐物語

林芙美子

青空文庫

四國のある山の中に、おもしろい狐がすんでいました。

いつも、ひとりで歩くことがすきでしたが、ある雨の日、いつものように餌をあさってぼつぼつ歩いていきますと、男の子が四五人、がやがや話しながら山を下っていました。

狐は、時々人間をみたことがあったし、人間は二本の足で立って歩いているので、狐は珍らしくて仕方がないのです。狐のおかあさんは、「人間のところへ行くとはひどいめにあうから、人間のところへぜつたいに近づいてはいけませんよ。」と、いつもいうのですけれど、狐は、人間の姿がおかしくて仕方がなかったし、第一、ひよろひよると、立って歩いているのがおかしくてしかたがないのです。狐は子供たちのうしろからそつとついて歩きました。

「このへんは六兵衛狐の出るところだぞ。」

一人の子供がいいました。

「晝間から出ることはないだろう。」

また一人の子供がいいました。

「晝間でも雨が降っているから出るかもしれん。」

また、もう一人の子供がいました。

時々、とおくで雷が鳴っています。

子供たちは、何となく氣味がわるくなつたのでしよう、歩いてきた子供たちは、ふっと足をとめて耳をそばたてました。すると、一人の子供がふいに後をふりかえつて、狐をみました。

「あッ、狐が出おつたぞッ。」

子供たちはびつくりして、まるで豆がはぜたようなすさまじい勢で、走って山を下りはじめました。

狐もびつくりしました。どうしてあんなに子供達がさつと走って行つたのだろうと思ひました。雨の降るなかを、狐もぬれながら、子供たちの後を追いかけてゆきました。

細い山道をいくまがりもして、やっと、人間の通るらしい道の近くへ來ますと、山の田圃ぞいのところで、大きい牛がもうもうとなっていました。

狐は自分たちよりも大きい動物をみて、しばらくあきれて眺めていました。何て大きいのだろう……。お尻は箱のように四角くて、骨ばっていたし、たれさがった腹や脚が泥だらけです。そしておもしろいことには、大きい鼻の穴にまあるいかんをつけて太い紐がつ

いていました。

狐はおずおず牛の前へ行つて、ていねいに頭をさげました。牛はびっくりして狐をみましました。

「あなたはいつたい、どなたさまですか。」

と、狐がききました。

牛は正直者でしたから、わたしは、桑助さんの家の牛で、赤兵衛というものだところたえました。狐は王様のようなだと感心しました。

「そうですか、わたしは山の中から来た六兵衛という狐ですが、このさきへは行かれますか。」

と、たずねてみました。

「ええ行かれますとも、道はどこまでもつづいていて、にぎやかな河口までつづいていきますよ。」

と、教えてくれました。

狐はていねいにあいさつをして、雨の中を歩きました。しばらく行くと、小さい村がありました。村のとつつきの家では、鶏が三びきほど遊んでいました。狐は何も彼も珍らし

くて仕方がありません。これは何というものだろうと思いましたが、それで、また、ていねいに頭をさげますと、三びきのあわてものの鶏はけたたましくなきたてて鶏小舎の屋根へ飛び上ってゆきました。

すると、家のなかから、おそろしく脊の高いおじいさんが棒を持って出て來ました。

「これッ、狐の奴め、お前、うちのとりを食うつもりだなッ。」

狐はびつくりしました。鶏なんか一度も食べた事がないのに、この人間は妙な事をいうと思つてぼんやりしていますと、こおんと固い音をたてて狐は額をいやというほどなぐられてしまいました。思わず尻餅をついているところを、狐はどうとう人間につかまってしまつて、木箱の中へいれられてしまいました。

その晩、人間たちはこんなことを話しあつていました。

「六兵衛狐というのはひどい奴で、五作さんの家からかえる時、おれはおこわめしをみやげにもらつていたんだが、祖谷いやを下る途中、とうとう六兵衛に化かされて、おこわめしをぬすまれて、ひでえめにあつたよ。」

「おれも、この六兵衛には痛いめにおうたぞ、妙正寺の番僧に化けて、おれから財布をとりにあげて、あげくのはてに、河の中へつつきおとされてしまったものな……。」

六兵衛狐は、箱の中で、こんな話をきいてびっくりしました。人間というものは何という嘘つきなのだろうと思いました。

六兵衛狐は、いままでにまだ一度も里へ降りたことはなかったし、第一、人間のようなかしい動物を、化したりなぞしたことは一度もなかったのです。

人間はおかしなことをいうものだと思います。晝間、頭をなぐられたところに、大きなぶが出來て、それが痛くて仕方ありません。山の中へ早くかえりたいと思いました。こんな嘘つきのところにいると何をされるかしのれないので、狐はだんだんこわくなってしまいました。

「おれのところでは、鶏をもう二度も六兵衛に食われつちまったんだからな……。」

「狐ぐらい動物のうちで悪い奴はないのう。あれは魔物だからな。雨の降る晩は、かならず山に灯をつけてからかうし、ろくな事をせんぞ。二三日、六兵衛はひぼしにして、腹をきれいに干して、いっぺん狐汁でもしてみんなで食おうじゃないか。」

「うん、狸汁はうめえそうだが、おれは、狐汁というのは始めてだ……。」

狐はびっくりしました。急にお母さんがなつかしくなり、涙をいっばいたためて息をころしていました。

夜が更けてから、狐は一生懸命に箱の蓋をもちあげてみました。石でものつかつていとみえて、蓋を持ちあげるたび、ごろつごろつと石が少しずつ動いている様子です。狐は根氣よく蓋を持ちあげて、とうとう長いことかかつて扇子がたに、箱の蓋をずらすことが出来ました。そつと首を出しますと、あたりはうすぐらいのです。かすかに障子の破れから月の光がさしている様子なので、狐はやつとの思いで土間へはい出す事が出来ました。人間はとてもおそろしい動物だとお母さんがいつていたけれど、本當だと思いました。だから、自分達の仲間は晝間は穴の中にひっこんでいて、人間にみつからないようにしているのだなと思いました。

狐は土間へ出て、縁の下からそとへ出ることが出来ました。まんまるいお月様が高くのぼつて、山の方でなつかしい鼻の啼く聲がしています。

祖谷いの山々が、こんもりとしていて、六兵衛よ、お母さんがとても心配しているから、早くかえつておいでといっているようにみえました。狐は急におなかがへってきましたし、頭のこぶは、しいたけみたいに大きくもりあがってとても熱をもっていました。

よろよろと歩いていきますと、ある家のところで、もう、もう、もう、と、牛が啼いていました。

「ああ、桑助さんの家の赤兵衛さんだな。」と、狐が牛小舎の前へ来て「こんばんわ。」と聲をかけました。

すると、眠れないでいたとみえて、赤兵衛は口をもぐりもぐりうごかしながら、

「ああ、こんばんわ。どうしました。河口まで行ってみたのかね。」

と、やさしく牛はたずねるのです。

狐はひどいめにあって、いままで箱の中にいた話をしますと、

「それは氣の毒でしたね。人間というものは何とも勝手なもので、わしらのようなもので、尻をひっぱたくのだからいやになるのさ。わしだって、たまには、からだのだるい時もあるのだが、何にしても、一日も無駄にはやすませてくれないでねえ……無理な仕事をする時、わしは時々、泣くこともあるのさ。いくらこんな生れあわせだといっても、これも神さまのおぼしめしで、こんなものに生れてきているのだもの、一つだってわしは悪いこともしたことはないのに、尻をぴりりツぴりりツとむちでなぐられる時は、つくづく泣きたくなってしまうよ。生れあわせで仕方がないけど、お前さんのように身軽るに山の中で自由に住める身がうらやましいさ……。」

と、いいます。狐も何だか牛がかわいそうで仕方がありませんでした。

「ほんとに赤兵衛さん、そうですね。わたしたちだって、人間だって、そうながくは生きられないのだから、嘘なんかいわないで、たいらに世の中をくらしたら、それが一番いいですね。あなたは、さつきから口をもぐもぐしていますが、何をたべているンですか。」

「別に何もたべてはいないのですよ。夕方たべたわらをいま食べなおして、胃からもどしているンです。」

「今夜はいい月夜ですね。」

「ああ、わたしは夜が一番樂しみです。人間がねてしまうと、もうわたしはひとりで何を考えてもいいのですからね。尻をひっぱたく人もないし、一番樂々とします。」

狐はほろりとしました。こんなに王様のようなからだをしていても、自分たちよりつらいことがたくさんあるのだなと同情しました。

「わたしは、このまま山へかえってしまえば、もう二度と里へはおりて來ませんけれど、元氣でいて下さい。そのかわり、夜の夜中に、山の上で、わたしは時々うたをうたってあげましょう。あああの時の六兵衛狐は元氣だと思つて下さい。——ほら、かすかに鼻がなっているでしょう。あの木のそばにわたしの巢があるのです。きつときいて下さい……。」

六兵衛狐は、氣のいい正直者の牛と別れて、淋しい山道を祖谷いやの山の中へいそいそと登

つてゆきました。

「ああ助かってよかった。何といつても自分の天地が一番いい。おかあさんはどんなに喜んでくれるだろう。」

六兵衛は腹のへったのも忘れて、まるで飛ぶようにしてお山へかえりました。晝間の雨はからりと晴れて、まるで晝のように明るいお月様が山や森を照しています。

それから毎晩、狐は里に近い岩鼻の上に出て、赤兵衛にきこえるように、「こおーん、こんこん、こおーん、こんこん。」となきました。晴れた夜は、村じゆうに、六兵衛のなく声がよくひびいてきこえたそうです。

青空文庫情報

底本：「童話集 狐物語」 国立書院

1947（昭和22）年10月25日発行

入力：林 幸雄

校正：鈴木厚司

2005年5月8日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

狐物語

林芙美子

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>